

明治三陸津波の記録1 ～風俗画報より～

1896（明治29）年6月15日午後7時32分に起こった明治三陸地震。岩手県上閉伊郡釜石町の東方沖200kmを震源としたマグニチュード8.2の地震に伴い、午後8時頃、三陸沿岸部に大きな津波が押し寄せた。三陸沿岸を中心に死者約2万2千人、流出、全半壊家屋1万戸以上という大きな被害となった。現在の南三陸町では下記のような被害の記録が残っている。

波高：志津川での平均3.6m 歌津・石浜12.6m 中山10.8m 田の浦10.3m

死者：志津川441人（清水浜168人 細浦122人 沖の須賀・埋地34人 その他117人）

歌津799人（田の浦208人 中山324人 名足115人 その他324人）

流失：志津川175戸（清水浜60戸 細浦34戸 沖の須賀・埋地36戸 その他45戸）

歌津273戸（伊里前60戸 田の浦52戸 港39戸 その他122戸）

この津波を報じたのが1896（明治29）年7月25日発行の『風俗画報』。「大海嘯被害録」と題し絵図でその被害のすさまじさを人々に伝えている。リアス・アーク美術館の収蔵コレクションから現在の南三陸町に関する絵図を抜粋し紹介する。

※海嘯とは、河口に入る潮波の前面が垂直の高い壁状になり、砕けながら川上に進む現象。
昭和初期までは、地震による津波も海嘯と呼ばれていた。



▲「志津川被害の惨状（志津川町）」

被災直後の様子。中央右手で数人の男たちが周辺の状況を報告しあっている。

「どこもひどくやられたらしい…どうにもならん…」。

手前では瀕死の者が地べたに寝かされ看病されている。

臨時増刊風俗画報第百十八号掲載（リアス・アーク美術館収蔵）